

特別講演

発達障害者への就労支援のあり方

— 高機能広汎性発達障害（HPDD）を中心に —

社団法人日本自閉症協会 会長
東京都発達障害者支援センター（トスカ） センター長

石 井 哲 夫

発達障害者への就労支援のあり方

－高機能広汎性発達障害（HPDD）を中心に－

社団法人日本自閉症協会 会長
東京都発達障害者支援センター（トスカ） センター長
石井 哲夫

はじめに

長らく自閉症児者の理解と援助に努めてきたが、今まで自閉症およびその近接領域の人たちに関わる際に、その障害分類概念をさらに細分化させる必要を感じなかった。それは、就学困難や社会生活が困難な自閉症の人との交流を円滑にするという「社会化」が、主たる課題となっていたからであった。

近年、高機能広汎性発達障害（以下HPDDという）への認識もできてきたし、学習障害（LD）や注意欠陥／多動性障害（AD／HD）などの近接領域の障害を持つ本人や家族、さらに支援者たちから、制度的対応の要請が行われるようになってきた。しかし、各障害についての研究者の見解には障害概念に関して不明なところもあり、実際に障害が重複されているものも多いと見受けられる。やはり、今も発達障害への臨床的対処の中心課題は変わらないと思っている。

この中心課題である「社会化」（社会の人々と関わり交流すること）に対して、今、二つの理論基盤が生じている。まず社会化とは、常に柔軟に新しい状況に入ることである。本人が新しい状況へ進むことに興味があれば、状況の変化は本人にとって苦にならない。自閉症児者は変化を嫌い、新しい状況に入ることに抵抗を示す。抵抗は古い体制が新しい体制に変わる葛藤に他ならない。二つの理論とは行動理論と発達理論である。葛藤を起ささないように、行動を新しい体制にしてしまうことを考えることが行動理論の考え方であり、これに対して、本人に抵抗を乗り越える努力をさせることが、発達理論である。私は発達理論の観点に立つ「受容的交流理論」を提起してきた。そこから自閉症者の就労支援を考えている。

1. 自閉症の障害特性

広汎性発達障害児者の行動に表われた障害特性は以下の点になろう。

現在、我が国の研究者が依拠している米国精神医学会の診断マニュアルDSM-IVを参考に、筆者の臨床的経験を加え、自閉症に関する障害特性とその理解のポイントを整理したい。

自閉症にも知的発達に遅れを伴うことが多い。しかし、精神遅滞が知的発達とそれに伴う適応行動を中心にする障害であるのに対して、自閉症は対人的相互作用の質的障害を中心にした広汎な障害と考えられる。従って、精神遅滞においては、諸機能の全般的な発達の遅れと捉えているのに対して、自閉症は、「広汎な領域における歪んだ発達の障害」と捉えている。

DSM-IVでは、(1)対人的相互反応における質的な障害、(2)コミュニケーションの質的な障害、(3)行動、興味および活動の限局の3点を上げ、それらが3歳以前にみられること、レット症候群、小児期崩壊性障害などでないことを診断基準の要点としている。

自閉症の心理特性の理解の基本として、まずその障害を人間関係の発達の障害を中核として捉え（対人的相互作用の質的障害）、精神発達、とりわけ自我機能の発達に着目して理解を進めることが重要と考えている。

ここで、自閉症の人たちが何故、普通の育ちにおいて容易にできる人間関係の体験が得られにくくなってしまいかについて、考えていることを述べてみたい。

自閉症をはじめとする発達障害について、学問的に明らかにされている何らかの中枢神経系の脳の機能的な障害という仮説は、かなり多様な現象に結びつくものである。ただ、そこで中枢神経系の機能として考えられる、統合化と中枢化を行う機能の障害として現れている事柄を以下の諸項目に分けて考えたい。

1) 脳の機能的障害を素因とした症候群の発症

- ①複雑な刺激の整理（区分け）の困難さ
- ②刺激に対する過敏さや不安の強さと衝動への耐性の弱さ
- ③衝動の抑制、環境との関係調整などの困難

2) コミュニケーションの質的な障害

- ①対社会、対人関係における質的な障害
- ②人間関係の依存、信頼感の形成、交流の障害
- ③社会的規範からの逸脱

2. 高機能広汎性発達障害（HPDD）の理解

高機能自閉症やアスペルガー症候群などHPDDの人たちの理解と援助について考察してみたい。

1) HPDDの人たちとの出会い

東京都自閉症・発達障害支援センター(本年10月1日より「東京都発達障害者支援センター」と名称変更)が事業開始して、既に2年半を経過した。本センターにおける相談支援の利用者数は1000名を超えようとしている。そのうち、18歳以上の人にかかわる相談件数は、全体の相談件数の5割近くを占めている。また、7割近くが知的障害を伴わない発達障害の人たちである。この人たちの大半は、長年、その障害が理解されない社会環境の中で暮らし、そのことから更に、二次的障害を併発するようになってきていることが明らかになってきている。

その経過をみると、小・中学校や高等学校在籍中に不登校となり、生活が昼夜逆転、さらには家庭内暴力を繰り返し、そして精神科病院への入院に至るといった事例が少なくない。しかも、その入院先において、発達障害児者への理解と適切な対応が得られているわけではない。または、大学を卒業(中には大学院修了者もいる)したものの、就職できない、或いは、いったんは一般企業に就職したものの、職場内において人間関係のつまづきや求められる業務がこなせない等の不適応状況に陥り、結果的に離職せざるを得なくなった人、中には鬱病や統合失調症などの精神疾患を併発している人もいる。また、行き場のない人

については、社会的引きこもりで数年から10年以上経過した人も多い。

さらに深刻な問題としては、司法事例が絶えないことである。弁護士や家裁の調査官など司法関係者の話によると、発達障害者にかかわる犯罪には、発達障害ゆえの生育環境上の孤立や、社会において支援が受けられず、定職にも就けないことから、食べるために、あるいは生きるために、罪の意識のないままに、犯罪に向かって押し出されていく状況が多い。

以下に、HPDDの来談者との面接や本センターで継続して実施しているHPDD当事者へのヒアリングにより、支援者側が教えられ考えさせられたことについて述べたい。

2) HPDDの人への援助事項

- ①本人に対して自己認知を求めたり、わかりやすい生活の枠組みをきめたりすることから、過敏な防衛機制を解く。(本人に対して一方的な評価態度をとらない)
- ②多様な人間接触の場を増やすことから、現実場面にふさわしい対し方を教える。
- ③頑なに自分の立場を保持することについては、本人の自発的発言を尊重しながら、かつ有効な助言のしかたを探す。
- ④気が変わりやすかったり、情緒的混乱が生じやすい人に対して、ロールプレイング(劇の方式で援助者が、本人が社会で出会う人の役割を演じ、本人の対人的な適応力を高める方法)を活用して、援助者との共感と対応の一貫性を高める。
- ⑤信頼関係の形成が困難(敵、味方の厳しい選別性)な場合には、本人がもつ人間関係網(本人に好意的に関われる人たち)の状況を把握し、活用する。
- ⑥この人間関係網は、いわば本人への理解者の集団でもあり、かつ社会的な常識などという社会の枠組み(フレーム)を知らせる役割を持つ。

3. 高機能広汎性発達障害(HPDD)の人への就労支援

1) 当事者への支援について考えること

就労支援のためには、まず本人が周囲の人に受け入れられ、就労に向けての生活の基盤を安定させることが大切である。そのためには、援助者は外側からは理解出来ない本人の内的世界を理解し、その上で、社会化に向けた援助を行うことが求められる。本人への対応について、援助者としての話し方にしても、求め方にしても、なるべく複雑な状況を作らないようにしたり、本人の認知や理解の状況をその都度確かめていく必要がある。

例えば、刺激に対する過敏さをもつ人については、混乱を避けるために刺激を統制することが望まれる。ただ、複雑な刺激を統制するということは、単に刺激を少なくすればよいというのではなく、本人の状況によって刺激の内容や程度を加減しながら、心理的に安定させ、その認知や意欲を進めるように働きかけていくことである。その際、本人に分かりやすい説明や提示の仕方の工夫、あるいは、穏やかな声掛けを行う。

なぜ、このような事項をとりあげるのかといえば、HPDDの人たちは、これまでの暮らしの中で、自己認識が育ちにくいことがあげられるからである。具体的に言えば、その障害特性から、本人の抱える困難性が周囲に理解されにくく、家庭や学校、職場

などにおいて、人から叱られたり、避けられたり、疎まれたりといった状況に陥りやすいので、本人としては人ときちんと向き合わず、防衛的な拒否を行い、注意されても自分を省みることをしなくなるからである。前述したように、学校卒業後、就職することができず、あるいは就職してもその離職率の高さ、転職回数の多さは他の障害に比べて群を抜いていると思われる。しかしながら、本人はそれらの経過について、「自分の何が、どこが、いけなかったのか。また注意すべきことはどういうことなのか」といったことを具体的に理解し納得するという自己認識を深めることができず、自信喪失や自己否定感ばかりが積み重なっていきやすい。あるいは反対に、人に対する非難、攻撃的態度を強めてしまう人もいる。

どのような仕事につくにしても、当事者を理解し、適切にその場での処し方や行き違いをきちんと説明してくれる通訳的な支援者が職場にいるという人的な条件の整備が必要である。

2) 家族支援が重要なこと

前述の如く、HPDDの特質としてあげられている現実生活の不応答は、生活に関わる常識的な規範が本人の中では成り立ちにくいことから生じるので、家族や援助者たちにそれらのことへの理解と対応を求めることは当然なことである。しかしながら、現実的には、親やその他の家族には、HPDDの人を抱えて暮らすことで生じる心理的な負担や生活上のストレスがあまりにも大きくて、苦勞している場合が多い。援助者は基本的にこの状況を理解していなければならない。そして出来る限りの社会的な資源を動員することが必要になってきている。

家族支援を行う際にも、本人の最善の利益を考慮することは言うまでもないことである。本人が十分な意志表示が出来ない場合の代弁機能は、必ずしも家族のみに任せられるものではない。特に就労期においては、本人はもちろんであるが、家族も、社会に出て働くという社会常識的な価値観で働きかけ、結果的に本人を追いつめることになりやすい。

これまで行われてきた社会常識側に立つ援助では、この家族間緊張を解消するどころか、ますます本人にとっては圧力となってしまうやすい。援助者は、家族の危機的状況の改善に向けて、家庭や職場における本人たちを理解し受け入れが進んでいくよう努めるべきと考える。

現在の地域社会には、かつての優れた家族支援機能は存在していない。したがって援助者としては、その家族支援機能を持っている資源を地域に動員する必要がある。継続的に、医療、福祉、教育等の理解者を家族と結びつけていくことを考えなければならない。

3) HPDDへの健康性支援と人間関係網

最近行ってきた研究と実践において、社会生活上の困難性が顕著なHPDDの人について、継続的に適切な支援を行っていくことで、その改善の可能性が広がっていくことがわかってきた。それは社会的な常識を本人に内在化させ、そして本人が周囲との折

り合いをつける機会を重ねることにより、社会適応が徐々に可能になってくることである。一方でこの障害により、周囲の人たちと良好な対人関係を保ちにくく、二次的な障害を発生し、就労はおろか、生活の安定も欠く状態に陥りやすいことも明確になった。また、障害によることではなく、生育環境の悪化から、社会的な活動のしかたや社会参加への対応が困難となることもわかった。

しかし、強調したいことは、この人たちに、向上心というべき生活改善の努力が明らかに認められるということである。私たちは、これを「心理的健康性」と名付けた。この健康性を支えている条件として、本人の内的世界を理解し受け入れ、かつ本人が必要としている人たちの関与（人間関係網）がある。

HPDDの人の日常生活や就労の具体的な事例において、人間関係の多様な展開により自己認識に良い変化を生じてきていることから「社会性の遅ればせながらの発達」「他人に気づかれにくい心理的健康性の働き」などという新たな福祉心理学的事実を認めることができる。その点をふまえて、HPDDの人たちがそれぞれ持つ心理的健康性や人間関係網を調べるのが重要な援助の手がかりとなることもわかってきた。

4. 雇用支援を考える

このような外側からは見えにくい障害を持っているHPDDの人たちの雇用を考えるときに、欠かせないことは、雇用する側の障害特性に関する配慮と好意的対応である。例えば、この人たちに対する具体的な配慮事項は、「同時に二つの指示は出さない」「丁寧さと速さという矛盾したことを求めない」「具体的に伝える」「暗黙の了解は求めない」「何事もルールとして分かりやすく伝える」といったものである。

このように、多くの人たちにとっては分かって当たり前のこと、常識的なことが身につけていない人たちに対する理解が進めば、互いの溝が埋まりやすくなる。

さらに、雇用する側にしても、彼らの障害特性を知識として知っているだけでは困ることが日常的に起きてしまう。実際に「突然のパニック」や「訳のわからない理屈の執拗な繰り返し」「日常に起こるちょっとした変更やイレギュラーなことで動けなくなってしまう」などを目の前で起こされたときに、「どうすればいいのだろう？」「何故？ どうして？」という疑問や不可解さは簡単には解消されにくい。そのような状況が継続すると、雇用する側の不安や本人に対する不満が募っていきやすくなる。そのため、雇用する側の立場にたって継続的に相談にのってくれたり、説明をしてくれる人の存在は重要である。

おわりに

HPDDの人たちへの就労支援が難しいと言われるのは、これまで蓄積された知的障害を主とする就労にかかわる支援の考え方をそのまま適用できないからである。ある就労支援機関の職員から、「HPDDの人は、まず、自閉症発達障害支援センターで直接支援をしてほしい。人の話を聞く、人に相談をする、カリキュラムの流れに乗るといったスキルを身につけてから、相談にきてほしい」と言われた。とても正直な意見ではあり、まさにHPDDの人のできないことを端的に示している。

HPDDの当事者たちと就労に関わる話をしていても、本人たちの考えはそれぞれ異なって

いる。「言われたことを淡々とこなす仕事が良い」「自分の特技のみを仕事に生かしたい」「単純作業や人に会わない仕事がしたい」「ヘルパーとして人を助ける仕事をしたい」。そしてそれぞれが持っている得意なことや良さもそれぞれに違う。彼らの特性を分かって、生真面目さや一芸に秀でた部分を生かし、苦手なところをサポートしたり、マッチングさせるマネジメント機能をもつ支援が充実してくることを望む。

この仕事に携わって、常に利用者や家族と直接接触しつづけることを、政治、行政、教育、福祉などの指導層に訴えるとともに、今後いっそう、社会の人たちに対する障害概念の普及につとめつづけなければと思っている。

